

杉森久英

食後の雑談



食後の雑談

杉森久英

筑摩書房



食後の雑談

一九七七年十二月十五日 初版第一刷発行

著者 杉森久英

発行者 岡山 猛

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二一八
電話 ○三―二九一―七六五一
振替 東京 六一四二二三

暁印刷 鈴木製本

すぎもりひさひで
杉森久英

明治四五年、石川県に生れる。
昭和三七年『天才と狂人の間』
で直木賞を受賞。著書に『猿』
『大風呂敷』『大谷光瑞』『夕陽
將軍』等がある。

食後の雑談■目次

I

- フランス語教えます 8
西洋文学の誤読 10
思いつき二題——「漱石」を
めぐって—— 14

- 漱石・芥川の手書きちがえ 17
芭蕉の無欲 19
唐宋八家文 26

II

- 国語教師は何をしているのか 30
国語教育のイロハ 46
国語教育批判の卓説——丸谷才一
「日本語のために」評—— 62
先生の言葉遣い 66
言葉のいろいろ 70
六分の俠気 74
コウメイ学校 77
日本語の小品 79
よの字 81

Ⅲ

ランプの生活 84
ふるさとを行く 86

少年の日 94

子供のころの釣り 97

中学生のころ 100

二十歳の原点 102

漱石の曾孫弟子 104

梵と絵馬と僕と 108

教員だったころ 113

銀座の安飯 120

Ⅳ

ブリ雷 180

ズワイガニ 183

カキの三杯酢 183

皮くじら 184

私の近況 124

伝記作家の仕事部屋 126

馬に聞いてくれ——「天才と狂人の

間」後記—— 138

おれに限って 145

大怪我 148

死の恐怖 164

根拠のない自信 171

照願ケツ下 175

くちご 188

雪の氷 189

だごじる 190

京都の酒 192

鮎 193
タコ 194

V

出発まで 200
イヴの墓 202
アラビアと「異邦人」 203
誰に見しよとて 206

VI

目黒の湯・驪山の湯 216
「かえる会」の穂高行 218
外国人と日本語 225
齋さん 229
私の愛蔵品 232
馬上の心理 234
左様でござるごもつとも 235

松山で食べたもの 195
オクラとむくげ 196

体格の差 208
パリの日本料理 208
降る雨 209
不当料金 212

仲間はずれの心理 240
御協力 243
年上・年下 244
相手の言い分 246
いわゆる鬼県令 248
水戸と大津 251
鳶の爪と猿の爪 255

泣いてくれる人 258

紙の花 261

うその効用 262

今西行 265

あとがき 273

おみやげ 266

世界の田舎者

統治者の知恵 268

膳の運び方 270

装幀

三井永一

食後の雑談

I

フランス語教えます

フランス語の先生にフランス語を教えたことがあるというのが、私の一生の自慢の種である。十何年も前のことだが、神田のK書房に勤めていたころ、昼休みに、ぶらりと近所のM大学へあそびにいった。

フランス文学の研究室をのぞくと、飲み友達のM・S君が、なんだかおそろしく大きな辞書（多分、ラルースだったろう）をかかえこんで、首をひねっている。いつもなら、のんきな顔をして、すぐ雑談をはじめるところだが、それどころではないらしい。

「どうしたんだ」

と聞くと、

「ひとつ、わからねえところがあるんだ。もうすぐ、授業がはじまるんだけど、困っちゃったなあ」

「どんなところ？」

「君に話したって、しょうがねえけれど……」

学生のころ、鈴木信太郎先生のフランス語入門講座を三か月聞いたきりの私に話したって、まったくしょうがないことは事実である。しかし、S君は、藁にでもすがるような気持だったのだろ

り、

「こうもり傘と、鯨と、どんな関係があるんだろうなあ」

「さあ、鯨と卵と、どこが似てるかという謎々なら、知ってるけれど」

「そんなの、誰でも知ってる。卵じゃないんだ。こうもり傘なんだ」

「見たところ、黒くて、曲っていて、水にぬれても平気だという点かねえ」

「鯨は、平気どころか、水の中にいなぎや、死んじゃうんだ」

「でも、何だか似てるじゃないか、感じが」

そんなことを言っているうちに、ハッと気がついたことがあるので、私はもったいぶって、

「うん、教えてやろう。こうもり傘というものはね、今は鉄で骨をつくるけれどね、十九世紀ころは、鯨の鬚を骨にしたのだ。だから、あのころの画を見てみたまえ。なんだか、ふうわりと曲ったこうもり傘をさしている」

「なるほど、そういうことか！」

「それで、その文章は解けるかね」

「解ける解ける。君はよく知っていたね」

「ついでにいえばだ、ルイ王朝の貴婦人の、あのふうわりとふくらんだスカートもやはり、鯨の骨が入ってるのだ」

「それは知っていたが、こうもり傘は気がつかなかった」

「もとこれ、同じ原理だね。どこを覆うかの違いだけだ」

私がどうして、こうも傘の骨が鯨だということを知っていたかということだが、私はその二、三年前に、モーパッサンの生涯を描いた伝記映画を見たことがある。主演俳優はハンス・ヤーライではなかったかと思うが、映画の最後の場面が、モーパッサンの死んだあとで、財産処分のため、売り立てがあり、彼のかつての恋人が、それを見に来る（あるいは何か思い出の品を買いに来る）というところだった。

売り立てが終って、恋人が邸の外へ出ると、雨がざあざあ降っている。すると、彼女に思いをかけている伊達男が、そばからそっとうもり傘をさしかける、というのだった。そのこうもり傘がいやに丸く、こんもりと曲っていて、どう見ても、現代のように、鉄製の骨と思えない。その彎曲は、そのまま貴婦人のスカートを思わせた。それで私は、ははあ、あのころは鯨の骨だったんだなと思ったのだが、それだけのカンで、当てずっぽに言ったのが、うまく当たったらしいのである。

もっとも、私はいまだに、鯨はフランス語で何というか、また、こうもり傘は何というか、知らないのだから、何でも知ってるだろうと思って教わりに来られたら、困るのである。

西洋文学の誤読

むかし「ウィルヘルム・マイスター」の日本訳を文庫本で読んだとき、マイスターが作中の美少女フィリーネを呼ぶのに「ちよいと、姐さん」という言葉を使っているの、ふきだしたことがあ

る。原文を見たわけではないが、多分「フロイライン」とでもいうのであろう。

それと前後して、シュールベルトの生涯をあつかった「未完成交響楽」という映画を見たら、シュールベルトと初恋の相手の伯爵令嬢とが逢曳する場面で（これは作中で一番詩的な場面だが）シュールベルトが伯爵令嬢の落したネッカチーフを持って、麦畑の中を、「フロイライン、フロイライン」と叫びながら、追うところがある。

そこで私は「ウィルヘルム・マイスター」の訳書を思い浮べて、ここでシュールベルトが、「ちよいと、ねえさん、ねえさん」と呼ぶことにしたら、どういふことになるだろうと思った。伯爵令嬢一転して、明治大正ころの本郷あたりの牛屋（肉屋ではない、牛鍋屋である）の女中程度に下落してしまふだろう。

もっとも、フィリーネはあまり良家の娘でもなかったような気がするから、「ねえさん」でよかったのかも知れない。そういえば、「アルト・ハイデルベルヒ」のケティも、たしか飲み屋の娘だから、これも、「ねえさん」でいいのかも知れない。しかし、ケティを「ねえさん」では、やはりブチこわしになるだろう。

しかし、「フロイライン」が「ねえさん」ではおかしくて「お嬢さん」でなければならぬなどというのも、日本の外国語教育が、もっぱら教室でおこなわれ、教室のお行儀のよさで塗りつぶされているところから来る偏見にすぎないのかも知れない。

しかし、問題はひとつひとつの訳語にだけあるのではない。西洋文学の理解そのものに、もっと大きな問題があるだろう。こんど創刊された「人間連邦」という雑誌の『「自然主義」の用法など』

という文章で、野田宇太郎氏がこのことにふれている。くわしく紹介している余裕はないが、簡単にいえば、日本語の「自然」は東洋古来の「人為の加わらぬ状態」をさすもので、英語やフランス語の *nature* とはちがうものだということで、傾聴に値する意見だと思う。

ところで、日本の自然主義だが、これが西洋のそれとまったくちがった発展（あるいは萎縮）の過程をたどったことについては、文学史家の間にいろんな説があるのだが、それらのほかに、私のちょっとした思いつきを付け加えてみたい（あるいは、誰かがすでに言っているとすれば、私の不勉強をさらけ出すだけだ）。

自然主義の作家の主張の中に、しばしば見られる一つは「こしらえ物では駄目だ、真実を書け」ということである。花袋なんか、しょっちゅう書いてるし、これが白鳥になると、「いい文章を書くには、修辭学はいらない。いい戯曲を書くのに、作劇術はいらない」になる。

これが子規あたりの写生の説から来ていることは、福田清人氏なんか早くから指摘しているとあるが、私にはこの「こしらえごとでなく、ありのままを」という主張の中には、「嘘はすぐバレるものだ、誠実だけが尊い」だとか「巧言令色鮮^{すな}し仁」だとか「男はあまりペラペラしゃべるものではない」だとかいったような、東洋的な抑制の哲学と同質のものがあるような気がするのである。つまり表面の華やかさよりも、内面の充実を重んずることになるわけで、これを押しつめてゆけば、最高の表現は沈黙だということになってしまう。表現を生命とするはずの文学が表現の貧しさを誇るというわけである。

ここから秋声の「いぶし銀のような」芸術や、筆に油が乗りだすとやめてしまいう葛西善藏の芸術

が尊重され、芥川の「アクロバットのな」小手先芸や谷崎の金ピカ趣味が軽んじられるという、大正文壇のふしぎな風潮が生れるのだが、その根本はやはり、前時代的な沈黙と抑制の道徳から発しているように思うのである。

トルストイが日本で特に愛好されたのも、そこから来ていよう。大体独歩の「牛肉より馬鈴薯を」という主張や、蘆花の「みみず」哲学にも見られるように、自然主義の作家は、農村出身、あるいは地方の下級武士出身が多かったので、彼らの中には、すべて近代的なもの、都会的なもの、人工的なもの、華やかなものに対する嫌悪と不信と嫉妬と反感があった。自然主義は、日本の最先端であるはずだったのに、その運動を担う選手たちの意識は、質実剛健、勤儉力行、不言実行の旧農民的、下級武士的モラルで固められていたのである。彼らは最新スタイルの洋服の下に、東洋道徳のふんどしを、しっかりと締めていたのである。

この自然主義——そしてその継続である私小説、心境小説は、ヨーロッパ文学の誤読とか、誤解とかいうものではなくて、それこそ、農業者から脱皮していない日本人の生活意識をそのまま反映しているような気がする。彼らは因襲や伝統をぶちこわすことに、異常な熱意を示したけれど、その意識の根柢にあるものは、彼らがぶちこわそうとしたものと、あまり変らないものであった——これが私のささやかな思いつきである。

思いつき二題 —— 「漱石」をめぐる ——

なにか珍しいこと、奇妙なことに遭遇しても、そのときは何とも思わず、何年も後、どうかすると何十年も後に、アッ、あれはこういうわけだったのか、と、突然頭にひらめくことがある。それも、特にそのことに関係のないことをしているとき、突然思い当るのである。

この間、私は町の喫茶店で人と待ち合わせているうちに、ふと次のようなことを思い出した。夏目漱石の「吾輩は猫である」の中に、寒月、迷亭、東風などの閑人たちが、苦沙弥先生のうちに集まって、むだ話をするところがあるが、中で東風が次のように言う。

「先達でも私の友人で送籍と云ふ男が、一夜といふ短篇をかきましたが、誰が読んでも朦朧として取り留めがつかないので……」

送籍というのは漱石をもじったものらしいとは、すぐに見当がつく。そこで私は「猫」を読むたびに、「漱石も、自分の号をもじるのに、へんなことばをえらんだものだな。もつとほかにえらびようがありそうなものだに」と思いながら、それ以上深く考えようともしないで、通り過ぎた。

ところが、この間、私は喫茶店でコーヒーをすすりながら、ふと、送籍というのは、漱石をもじったところか、このほうが起源かもしれないぞ、と思ったのである。